

第3回

オフィスでも忘れてはいけない「おもてなしの心」

「しつらえ」に「もてなし」が加わることで オフィス空間は初めて居心地がよくなります。

日本人が本来持っている感性を大事にすることでオフィス空間はもっと居心地のいいものになるものです。そのキーワードである「もてなし」の心について解説をさせていただいてきた山田節子さんの連載は今号で完結します。第3回目は、山田さんがコーディネーターとして長く仕事を一緒にしているデザイナーの内田繁さんを迎え、対談をしていただきました。

内田 繁氏
デザイナー



1943年、横浜生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。81年、スタジオ80設立。代表作にYOHJI YAMAMOTOの店舗、京都ホテル・ロビー、神戸ファッション美術館、門司港ホテルなどがある。毎日デザイン賞、第1回桑沢賞ほか多数受賞。著書に『インテリアと日本人』『椅子の時代』『日本のインテリア』などがある。東京造形大学客員教授。

空間デザインは「しつらえ」というハードウェアと「もてなし」というソフトウェアによって完成する

山田 内田さんとは幾度となく一緒に仕事をしてきました。花器をつくり花を生けるときでも、空間の演出をするときでも。

内田 そうだね。日本では昔から「しつらえ」と「もてなし」の両方があるって初めて居心地のいい空間ができるって言われているけれど、僕が「しつらえ」の担当なら、山田さんは「もてなし」のほうをカバーしてくれるので、それによって一つの作品が完成しているといってもいい。

しつらえ(設え)

ある目的のためのある場所に設けられた施設。

もてなし(持て成し)

人や物事に対するふるまい方。態度。客に対する扱い。

下記バックナンバーは<http://www.websanko.com> をご覧ください。

オフィスでも忘れてはいけない「おもてなしの心」

05年 Ⅲ号 作法の文化を若い世代に伝えていけるオフィスなら
贅沢な空間がなくとも「おもてなし」はできます。

05年 Ⅱ号 「おもてなし」はその場その時のコミュニケーションの工夫

「日本の伝統に学ぶ21世紀のオフィス文化」

04年10月号 仮説の空間

04年 7月号 空間の領域

04年 4月号 仕切りの構築

オフィスでも忘れてはいけない「おもてなしの心」

はやわかりメモ

居心地のいい空間は「しつらえ(設え)」だけでは完成しない。そのハードウェアに「もてなし」というソフトウェアが加わって、初めて満足できる空間になる。オフィスのような近代化された空間は、同時に西洋化されているため、日本人のもつ文化との間で違和感を生じる。今の日本人はマニュアル化された様式をそのまま受け入れてばかりいるため、自分の感性で何が正しいかを判断することを忘れている。20世紀の文化は人々に強さだけを求めてきた。しかし日本では人の弱さを「はかなさ」として美学にまでしていた。本来、人は弱いものだという前提に立つことが大切。オフィスワーカーは自分の自然な感覚で、居心地のいい空間をつくっていくべき。上からの押しつけのマニュアルではなく、ユーザーの視点で空間づくりのためのルールを構築していく方法もある。

山田 オフィスづくりにも同じことがいえますね。

内田 もちろん。依頼された相手が銀行なのか、ビール会社なのか、コンピュータ関連の会社なのか、それによって中で働く人や訪れる人への「もてなし」の形は変わってくる。もちろん同じ会社のオフィスでも、どんな業務に使うかによっても変わるね。だから、そこまでしっかりヒアリングをし、考え抜いて「しつらえ」をつくらないと居心地のいい空間なんかできないんだ。つまり、空間を、そこにいる人のためにアイデンティファイ(一体化)することが、本当の意味でデザインだといえる。

山田 私が担当しているコーディネートという仕事も目的は同じですね。「もてなし」を工夫することで空間とアイデンティファイしていく。

内田 今は、そっちが重要になってきているんじゃないかな。特に、変化するビジネス環境に対応すべきオフィスでは、なおさらそうだと思う。

山田 オフィスは仕事の間であると同時に生活の間でもあるのに、現代のオフィスはほとんど生活の面が希薄になっていて、そのせいで居心地を悪くしてしまっているように思います。たとえば、私たちは普段、季節を感じながら暮らしているのですが、オフィスに入ると四季がまったく感じられない。だからこそ、「こうやって使えば快適ですよ」と提案するコーディネートの仕事が必要になってきているのではないのでしょうか。

内田 心が痩せちゃったんだよね、現代人は。自分の感覚も、マニュアル的に道具を使うことに必死になっている。そこには精神的な余裕がなくなっているんじゃないかな。

山田 自分で考えることをしないのでしょうかね。

内田 これは近代化の弊害の一つだろうね。もちろん、世の中が新しくなっていくのはいいことなのだが、日本の場合、明治以降に近代化と西洋化が同時に始まったので、そこで混乱し、生活上のアイデンティティ(個性)を失ってしまったような気がする。西洋のオフィスも問題はあるものの、彼らはもともと自分たちの暮らし方の上に近代が乗っているから、まだ工夫がしやすい。この点、日本を初めとする東洋では、近代化と西洋化の2つのショックを受け、自分たちの本来の暮らし方との融合ができていないように思う。

山田 それはありますね。最近、政府がクールビズを提唱したことでネクタイをはずしているサラリーマンをよく見かけます。多くの人は、ネクタイがある場合とない場合のファッションコーディネートの違いがわからないのか、とても誉められる格好とはいえません(笑)。これは提案者である政治家も同じですね。その中にあって、総務大臣の麻生太郎さんは、人の目にも涼やかな麻のシャツを着てコーディネートしていらしたのは、ちょっと光っていましたね。さすがに吉田茂さんのお孫さん、衣更えの本質をよく知っていました(笑)。

内田 西洋の文化を知らなくても、日本人のセンスで考えればいいんだよね。山田 そうなんです。ひと昔前、まだ冷房がなかったころは、夏になるとお父さんたちはソフト帽を被ったり、もっとゆったりしたシャツを着たり、ちゃんと自分の感覚で、この風土にあった夏のスタイルを考えていたんです。それが、仕事がどんどんマニュアル化していくなかで、いつの間にか、夏支

度に対する視覚的にも触覚的にも表現感度を失ってしまった。これは内田さんのように、まさに心が痩せちゃったことなのではないかと。

内田 僕は今、大学で身体論を教えているんだが、それは、日本の近代化において身体の問題が最もおざなりにされていると思ったからなんだ。日本人と西洋人はもともと身体が違う。それはこの国の独特なモンスーン気候から生まれた「座る」とか「靴を脱ぐ」という文化を背景に、身体の仕組みそのものに差異ができたんだね。だから西洋的な家具や室内デザインをそのまま持ってきても、日本人にとってはなんか合わないという問題が起きていた。それに関わらず、上からの公(おおやけ)の近代化によって、身体の違いや文化の違いを無視した空間づくりが行われてきたことで、いろいろな不都合が生じているのだと思うね。

「強さ」だけを信奉してきた20世紀型文明の限界を
「弱さ」までも美学にしてきた日本人の感覚が変わる

山田 今後、この国はどんな方向に向かっていけばいいかということですが、私は自由な発想のできる若い人に期待したいですね。たとえば、日産自動車の最近の注目商品であるcube(キューブ)。あの車は25歳の若者がデザインをしたのだそうです。彼らの世代の視点でとらえた心地のよさは、左右非対称のボックス型で、スピード感覚を重要視しない表現になり、これまでの自動車の概念を覆すものになったのだそうです。これは自動車メーカーにとって一番採用されにくいコンセプトだったのです。しかし販売してみると、ユーザーたちは飛びついた。これなんか、均質さやスピードを重視した近代化に逆行したアイデアが評価された好例だと思います。

内田 そんな車に商品化のゴーサインを出した会社も偉いね。

山田 cubeの話は、先日、日産自動車のデザイン部長のお話を聞く機会があったのですが、最初のプレゼンテーションでは、その社員が「どうせ、みなさんにはおわかりにならないでしょうが……」と提案してきたそうです。部長さんは、その言葉が心に残り、何かビジネスのヒントがあると思い、その若者の出入りする店に足を運び、彼等の楽しんでいる音楽を聴き、彼らの文化を感じ取り、商品化を決めたとおっしゃってました。近代化を絶対視しない若い人の発想を生かすことで、閉塞した社会状況に新しい風穴が見つかる予感がしています。

内田 車のデザインといえば、cubeとはまったく逆の方向がもしれないけれど、僕はイタリア未来派から生まれたフェラーリはやっぱすごいと思うんだ。そのころのイタリア人たちは、自動車の登場によって初めて体験するスピード感をストレートに素敵だと感じ、それを形にしていたんだね。ところが、その動きがドイツに移ると、「車はたくさんの人やモノを運べる便利な道具にしよう」「スピード感を感じない丈夫なボディにしよう」とコンセプトが変わってきてしまう。ここから今に続く近代化が始まるんだ。cubeの場合はスピード感を追求する未来のデザインとは正反対の発想による車だが、合理性だけを追求していく近代化に抵抗しているという点では、お互い通じるものがあるのかも知れない。

朝倉 撰(あさくら せつ 1922～)

舞台美術家、画家。彫刻家朝倉文夫の長女として東京に生まれ、幼少から日本画を学ぶ。1970年に渡米してからは舞台美術の仕事を始め、前衛劇から古典オペラまで幅広く手がける。イラストレーター、装丁家としても活躍。桑沢デザイン研究所の教授も務めている。

山田 オフィスの場合、いろいろな人が使うので、個人的好みでの選択のものを置いてはいけないという雰囲気があり、どうしても無機質な空間になってしまうのでは。

内田 空気というか、そういうルールを上から押しつけちゃうんだろうね。マニュアルとか法律とはそういうものなんだよ。だからそこからは、落ち着く空間は生まれない。

山田 企業風土としての美学が合理的経営の理論の中で完全に排除されてるんですね。

内田 公のルールってのは大事だけれど、それはすべて上から押しつけ



なくてもいいはずなんだ。日本では、昔から「他人の家の垣根の中には入っちゃいけない」というルールがあった。これは民衆が自分たちで決めたルールだから自然に守られるし、決して窮屈ではないんだ。ところが、上からの法律によって家宅侵入罪なんて決められてしまうと、そこで感覚的なものがなくなっちゃう。本来、共同体とは、みんなでルールを決めれば十分に機能するんだ。だからオフィスも、使う人たちがいろいろ考えていけばいい。それをしないで、押しつけられたマニュアルにしか従わないから、いつまでたってもオフィスはよくなるのだと思う。

山田 まず身のまわりの小さなことから変えていけばいいんですね。オフィスで働く人や訪れる人が、生活者の感覚で「心地よい」と感じられる、ほどよい緊張感や変化を感じられる環境をつくることから始めるのが大事なんです。大規模なリニューアルをしなくても、それだけでオフィスはずいぶん変わります。そして、企業風土として「しつらえ」の質を高めていく。そんな視点が大事なのかもしれない。

山田 その学生の例は笑えませんよね。今の日本企業のオフィスの多くが、もしかすると機能だけが詰め込まれた、同じように変なデザインなのかもしれないし。

内田 たしかに、普通に考えたら使いにくいようなデザインのオフィスが多いね。山田 先ほど話したように、オフィスは生活の場でもあるにも関わらず、「仕事の場だから生活感のあるものは持ち込まない」という概念だけが優先して空間がつくられてしまうからでしょう。仕事を特別視し過ぎるため、生活感が欠落した判断やものがつくられてしまうのでは。仕事も人間の生活の一部だと思うのですけど。

内田 「オフィスはこういうものだ」というマニュアルが先にあり、誰もがそれに疑問を持たずに従うからそうなっちゃうんだよ。これはオフィスだけの話じゃないよ。以前、事務所のメンバーのためにハンバーガーを15個買おうとしたんだが、そうしたら店員が「ここでお召し上がりですか？ それともお持ち帰りですか?」って聞くんだよ。1人で15個も食べるわけないじゃないか(笑)

山田 建築家の安藤忠雄さんが東大で教えているころ、学生に「花壇に毎日、水をあげてください」とお願いしたら、なんと、雨の日にも水を撒いていたそうです。これが現実なんだと嘆いていましたよね(笑)。

上から押しつけられたマニュアルでは感覚が反映されない 使い人自らが共同体としてのルールをつくっていくべき

内田 なぜ、日本人はそんなにマニュアルばかりに頼っているのかといえば、それはたぶん、今の日本が失敗を許さない社会だからなんだよ。成功はあまり評価されず、逆に一度でも失敗すると出世コースからはずされてしまう。だから失敗しないようにマニュアルに頼るんだね。それで成果が出なくても、マニュアルのせいにはできるから。

山田 それも近代の概念としての「統一規格・単一正解」的な思想があるからなのでしょうね。その結果、よいものを付ける消去法の社会になってしまった。でも、失敗も大切ですよ。

内田 空間づくりに話を戻せば、最初にいった「しつらえ」は、それだけあっても人間はうまく使いこなせないの、デザイン自体はそのまま成功にはつながらないんだよ。でも、そのあとでいろいろ試行錯誤をし、「もてなし」を付け加えていくことで中にいる人の身体に合ったものになっていく。つまり失敗を許さなかったら、いいオフィスなんかつくれないんだ。

山田 その「もてなし」あるいは「ふるまい」が忘れられているので、概念で出来上がった、不自由でゆとりのないオフィスでガマンしている会社が多いのでは。

内田 デザインだけでは完璧ではないんだよ。もちろん、住宅とか、オフィスとか、その使い方に合わせて設計はするものの、使い始めればそこに必ずモノが置かれるから、最初のデザインは崩れてしまう。だからこそ、「もてなし」によって調整していく必要があるんだね。

山田 空間は、使い方と生き方や考え方のセットによって完成するものだからね。例えば朝倉撰さんのご自宅は、うずたかく集積されたものに埋もれた空間ですが、とても居心地がよく、朝倉さんの存在を感じさせてくれますね。

内田 朝倉さんの家は部屋中に積んである本も「しつらえ」の一部って感じだったね。乱雑でも、本人にとって落ち着く空間だったんだから、ああいうのがいいデザインというのかもしれない。

アンドレア・ブランジ(Andrea Branzi 1938～)

建築家、デザイナー。イタリア、フィレンツェ生まれ。1955年、ラディカル建築のグループ「アルキズーム・アソシエート」を旗揚げしたほか、「メンフィス」や「アルキミア」といった20世紀のイタリアデザインを代表するグループの創設にも携わった。デザイナーとしてはカッシーナ、アレッシー、ザノッタなどで作品を発表している。現在、ミラノ工科大学インダストリアルデザイン部門教授を務める。

山田 弱いですよ、人間は。そして、日本人はそのことをよくわかっていて。だからこそ「はかなさ」「移ろい」という言葉が美しさの重要な表現として使われてきたのです。

はかなさ(儂さ、果無さ)

消えてなくなりやすいこと。もろくて長続きしないこと。結果の実現があてにならないこと。

内田 そうそう。生活上の弱さに通じる質素な状況ですら「わび」(侘び)とって美学にしちゃうんだからなあ。「はかなさ」も無常の美学につながっているね。そしてそれは、何でもかんでもコンクリート漬けにして強固にしていこうとした20世紀の近代化とはまったく逆の思想だった。

山田 アンドレア・ブランジが90年代から「weak modernity(ウークモダニティ)」を提唱していますが、イタリアにも同じような美学があったのでしょうか。

内田 イタリア人はヨーロッパの中でもちょっと特殊で、目に見えない世界を知っているような気がするな。建築家のアルド・ロッシも似たようなことをいっていた。だから日本人とイタリア人は、案外、ウマが合うんだよ。

山田 内田さんはアルド・ロッシとたくさん仕事をされましたが、ロッシは日本企業へのプレゼンテーションをされる時、最初から図面や模型を見せて説明するのではなく、クライアントと一緒に過去の時間や場をイメージしながら散歩したり、楽しんだりして、一体の空気感を味わってもらおうとしていましたね。

内田 共通する匂いを感じてもらうことで、自分をわかってもらおうとしたんだろうね。そこにあるのはやはり身体論と同じで、人間の自然の感覚の中からしかいいデザインは生まれないという発想でもある。

アルド・ロッシ(Aldo Rossi 1931～1997)

建築家、デザイナー。イタリア、ミラノ生まれ。ベネチアピエンナーレの建築部門のプロデューサーを務めた。日本では内田繁のプロデュースにより「ホテル・イルパラッツォ」を設計。また、「門司港ホテル」も彼の作品。他にもケトルやコーヒーマーカーなどの生活用品のデザインも手掛けた。

山田 普通に、「心地よさ」とか、「美しさ」といった感覚をなくしては、何もつくれませんからね。

内田 そうなんだよなあ。ところが、大学で学生たちにデザインをさせると、それがまったくわかってない。たとえば「背中にくっつけて、いつでもどこでも座ることのできる椅子」なんて作品を平気で提出してくる。思わず、「おまえ、本当にそんなものが必要だと思ってるのか!」って怒鳴っちゃった(笑)。世の中の多くのデザイナーも同じで、とにかく「今までにないもの」を考え出さなければ」という強迫観念に縛られ、自然の感覚と離れたものをどんどんつくってしまう。

イタリア未来派

20世紀前半にイタリアで展開された前衛運動。美術、文学、音楽、演劇、映画、写真、建築、デザインなどのあらゆる分野で人間生活の領域を変革しようとした。当時の時代を背景に、機械によって発展していく人類の進歩のスピード感や躍動感を表現しているのが特徴。

山田 内田さんもcubeの若者の発想は好きですよ。

内田 よくできたデザインというか、本当なら「こういう作品をつくるのは俺の仕事なんだ!」って、くやしかったよ(笑)。

山田 そういう意味では、日本の企業も変わってきていると感じます。トヨタ自動車も、ただ合理的に車をつくるだけでなく、自然や安全に貢献できる商品づくりがこれからの課題だと宣言しています。「走れば走るほど空気が綺麗になる車」が現実となる可能性が生まれ、未来が開ける気がします。トヨタも日産も、それぞれに独自の視点で、考えをしっかりと打ち出そうとしていますね。



内田 企業は何をすべきところなのかという原則論にやっと戻ったのはいいことだね。これが個人でも同じで、われわれは、つい他人と同じ格好をしているうちにマニュアル的に生きてしまい、自分の存在意義を希薄にしてしまう。僕らは学生のころ、よく「人はなぜ生きているのか?」といった論争をし、最後はケンカになったりしたんだけど(笑)。最近、そういう根本的な問いかけを聞かなくなったな。それはやっぱり、精神的に疲れてしまっている証拠なのだと思う。

山田 20世紀の後半は、とにかく何をしてもよい、利益をあげて生き残るとい時代だったから、人間らしさを捨て、みんな同じ甲冑で武装し、戦うしかなかったのかもしれない。

内田 僕や山田さんが何度か一緒に仕事しているイタリア人デザイナーのアンドレア・ブランジも同じようなことをいっているね。20世紀は強いものだけを信奉してきたが、本来、人間とは弱いものだというのが主張だ。それを無理矢理に強くしようしてきたことで、20世紀の文化は破綻したとさえ指摘している。